

---

# クロスレイド ~ 緩やかに腐滅する天空の理想郷 ~

元村良一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クロスレイド ～緩やかに腐滅する天空の理想郷～

### 【Nコード】

N8251Z

### 【作者名】

元村良一

### 【あらすじ】

リア<sup>フォリア</sup>神皇国という優れた技術を有する、世界唯一の浮遊都市国家レミア

そこに住む少年アレンは類い希な推理能力を持ち、神衛騎士として将来を嘱望<sup>しほくほつ</sup>されていたものの自らの過ちによって親友のウィエルを目の前で失い、心に深い傷を負っていた。

そんなある日、幼馴染みの少女イリアから「テロリストによって都市が墜とされようとしている。解決のために協力してほしい」と頼まれるが、自信が持てないアレンはそれを拒否。口論の末にケン

カ別れしてしまつが……

## プロローグ

いったいどこでそんな言葉を耳にしたのか憶えてはいないけれど、この世に生まれ出たすべて生物は皆、死ぬために生きているのだと言う。

(なるほど。正論かもしれないわね)

まもなく日付が変わろうとする頃、地上四百メートルを超す高層ビルの屋上で一人フェンスを乗り越えたわたしは外縁に腰を下ろし、何気なく両足をばたつかせながら心の中で呟いた。

聞くところによると幾千幾億もの生物が蠢くこの世界において、神々でさえ死を避けることはできないと言う。多少先延ばしにすることはできても、決して“死”という絶対的なものからは逃れられない。確かにそれは真実だろう。

でも、それならなぜわたしたちは生まれてくるのだろうか？

生きている間にどんなに素晴らしいことを為そうとも、遅かれ早かれ必ず死んでしまう。

死ねばこの身体もただの肉の塊と化し、やがて腐り果てて大地に還る。心は虚空に飲まれ、他者に残る記憶や思い出も風に流される塵のように、いずれ時間がすべてを消し去ってしまう。

それが、たまらなく悲しい。

別に自ら望んでこの世界に生まれてきた訳ではないけれど、それでも絶対不変の真実について思いを巡らせると何もかもが虚しく思えてきてしまう。

だからこそ、わたしは“ここ”にいるのだろう。

「珍しいわね。あなたが時間通りに来るなんて」

背後を振り向くことなく、わたしは皮肉混じりの言葉を吐き出した。

わざわざ確認するまでもない。フェンス越しに“彼”がいる。

いつ現れたのか？ まったく察知することができなかった。

けれども、そんなことは日常茶飯事だ。いちいち驚いてなどいられない。

「そう言うお前もな。こんな虚飾にまみれた都市を見て、なにか思うことでもあるのかな？」

「まあ、それなりに……ね」

ここから見える景色はその大半が闇に包まれているけれど、色とりどりの燭光が花のように咲き乱れる様はどこか幻想的な雰囲気を感じさせる。

でも、わたしはこの都市が大嫌いだ。

綺麗なのは見かけだけ　その本質は歪んでいて、とても理解することができない。

「人が自らの叡智で以て作り上げた天空の理想郷。アストレア城を中心におよそ九千ヘクタールもの大地を海拔四千メートルの空域へ解き放った世界で唯一の浮遊都市国家　」

「でも名前が気に入らないわ。なにがレミリア神皇国よ。神様気取りもいい加減にしてもらいたいものだわ」

「確かにな」

よほどわたしのセリフが面白かったのか、彼は愉しそうに声を漏らした。

「あらゆる不義と欺瞞、なによりいまなお恥じることなく“大罪”を犯かし続ける都市の存在をこれ以上見過ごすつもりはない」

「……と言うことは、とうとうやるつもりなのね？」

確認するように言うと、彼は「ああ」と力強く肯定してた。

「いくつか不確定要素が残っているが……時間が無い。うまく行けば二、三日中には『計画』を実行に移すぞ。お前もそのつもりで準備をしておいてくれ」

「でも、他のことはとかく例の件についてどうするつもりなの？」

「問題ない。先日お前が危険を冒してくれたおかげでかなりの進展があった。加えて懸案事項の一つだった“鍵”の正体と行方が判明した」

「なるほど。それでわたしを呼んだのね。その“鍵”とやらを取り  
に向かわせるために」

あれからまだ数日しか経っていないと言つのに、相変わらず人使  
いが荒い。

「で、具体的になにをすればいいの？」

「なに、簡単なことさ。今日の午後この場所で行われる競売会に参  
加し、ある物を競り落として欲しい。詳しいことはこのメモを見て  
くれ」

「別に構わないけど既に場所が判明しているのなら、いまから盗み  
に行けばいいだけの話じゃない？ 丁度そのビルの屋上にいるんだ  
し、わざわざ競売会に参加する意味がわからないわ」

むしろマイナス要素が多すぎる。

特にわたしの場合とある事情から指名手配などはされていないけ  
ど、それでも連中には顔が知れ渡っているし、この状況下でノコノ  
コと公共の場に姿を見せれば取り返しのつかない事態を招きかねな  
い。すると彼は「他に適任者がいないんだ」と溜息をついた。

「前の事がある以上素性の知れない者を使う訳にはいかないし、折  
悪しくその時間“外”の連中との打ち合わせがあるためどうしても  
参加することができないんだ。また保険を使うことも考えたが……  
できればこの手は使いたくない。さらなる問題を引き起こしかねな  
いからな」

「なら」

「まあ聞け。調べたところ鍵には『正確さ』が求められるらしい。  
鍵そのものは別に珍しくも何ともない物だが、この国の成り立ちや  
背景を考えるといま出回っている物は正確さに欠ける と言っ  
り変わってしまったっている可能性が高い。もともと外から伝来した物  
だしな」

よくわからないことを言う。その辺りのことはメモに書かれてい  
るのだからうけど。

「それにお前は『盗めばいい』と言っが競売に出される物はかなり

貴重で、同じ物があといくつこの都市に残されているかわからない。時間的にも他を捜す余裕はないし、これまで派手に動きすぎた反動か、あるいは連中にも後がないからなのかはわからないが、どこもかしこも厳重な警備が敷かれている。聞けば女皇は公式に連中に対して事件解決を命じたらしいしな」

「それ故に、可能な限り穏便に行きたい……と言う訳ね。でも」

「ああ。確かに危険はある。向こうには“あの男”がいる上に、状況などを考えると競売会自体が罠の可能性も否定できない。いくらなんでも俺たちにとって都合が良すぎるからな」

「でも、このまま手をこまねいている訳にもいかないでしょう？」

「その通りだ。やるしか他に道はない。それに楽観的かもしれないがお前の顔を知っているのは連中を除けばごくわずかだろうし、変装した上で能力を使えば人混みの中でもそう簡単には見つけれないはずだ。なによりお前なら多少のことがあっても切り抜けられるだろう？」

「確かにそうだけど、でも、問題があるでしょう？」

「参加中。もしくは商品の受け渡し時、だな」

「ええ。さすがにその時ばかりは注意が必要でしょうね。能力も意味をなさなくなるし、連中にも後がないとするなら、なりふり構わぬ手段に出てくることも大いに考えられるわ」

「賭け……だな」

「そうね。しかも、かなり分の悪い賭けだと思っけど？」

「だが、やるしかない。そのため詳細に関してはお前に任せる。どうしても言うなら競売会の様子を見ているだけでもいい。その後競り落とした者から盗むという方法もあるしな」

「いずれにせよ、なんとかするしかなさそうね。了解したわ」

頼むぞ　そんな呟きが聞こえた直後、音もなく気配が消えた。わたしは何気なく振り向いたが、そこには誰の姿も残されてはいなかった。

まるではじめから誰もいなかったかのようにな。

「……ふっ」

一つ息を吐き出したわたしは、不安とは別に込み上がる思いを半ば強引に無視した。

彼の言う「計画」が実行に移されれば、もはや偽りの楽園はその存在を保つことができなくなる。それどころか、これまで可能な限り避けていた民間人への被害も相当数出ることになる。

その規模は百や二百では済まされない。

確実に、多くの血が流れる。

(そうまでして叶えたい“想い”か)

けれど、彼は気付いているだろうか？ その“先”にあるものを。

「ほんと。皮肉なものよね」

ふと見上げた先には、美しい満月が輝いていた。

都市が放つ強烈な光に屈することなく穏やかな表情を浮かべる月

しかしどこからか湧き上がってきた雲に、その素顔を覆われようとしていた。

それはこの神皇国の未来を憂いているのか、それとも……

わたしは無心で空を見上げながら、そっと右手を伸ばした。

決して届くはずがないのに　なぜかそうしなければならぬよ  
うな気がして。

わたしはただ言葉もなく、夜空に向かって手を伸ばし続けた。

## プロローグ（後書き）

某新人賞で、ものの見事に一次で玉砕した作品です。

小説に関してそれなりに勉強してきたつもりですが、自分でもどこが悪いのか？ なぜ一次で落ちるのかわからないので、皆様の忌憚のないご意見をお待ちいたしております。

第一章「光と影の楽園」(1-1)

1

(まただ……ッ！)

うねり狂う闇の中に堪え難い腐臭が混じるのを感じ、オレは額の上に左腕を乗せたあと肺に溜め込まれた空気と共に絶望を吐き出した。

混濁する意識、言い様のない倦怠感、乾きを訴える喉……今日は頭痛を感じないだけマシなのかもしれないけど、その分妙に身体が重く感じられる。

(オレはいつたい、どうすればいいんだろう?)

言葉なく問いかけても、答えはどこからも返ってこない。

文字通り運命を変えた“あの日”から、不定期に見せつけられる“夢” きっと死ぬまで忘れることはないだろう。そしてオレ自身忘れるつもりはない。

(でも……っ！)

込み上がる感情のせいで、勝手に涙が零れ落ちる。オレはそれを腕で乱暴に拭い去ると、もう一度大きく息を吐き出した。

「……ああ、そうさ。もうどうしようもないことくらい、充分すぎるほどわかってる！」

オレはきつと未来永劫苦しめられるのだろう。

苦しんで、苦しんで、苦しみ抜いて やがて惨めに死んでいくのだろう。

「クソッ！」

險越しに感じられる陽光が勘に障る。オレの心はこんなにも乱れているのに、どうやら外は今日も快晴らしい。

もうダメだ。我慢できない。仕事が終わったらカーテンを買いに行こう。

もともとこの家に住み始めた頃からあった物だし、柄は気に入っていたのでそのままにしておいたけど、もう限界だ。

(つたく！アホらしいっいたらありゃしない)

こんな下らないことで腹を立てるんで、我ながらバカの極みだと思う。自分で思う以上に追い詰められているのかもしれない。

(そんなことより、いま何時なんだ?)

幸か不幸か繊細で神経質な性格のおかげで、これまで一度もアラームで目覚めなかったことはない。恐らく習慣と悪夢のせいでアラームが鳴る前に目が覚めてしまったのだろう。ゆっくりと両目を開き、時計を確認しようとして　オレは思わず絶句してしまった。

別に寝坊した訳じゃない。むしろ早すぎるほどだ。

でも、オレの関心はそこにはない。と言うか今まで気付かなかつたのが不思議なくらいだ。

少し張りのある生暖かい感触と、オレの物ではない誰かの息遣いあまりにも“あり得ない光景”を目の当たりにして、完全に思考が停止してしまった。

「……んあ？」

唐突にそいつが目を覚ました。

「ふああ……よお、アレン。おはよう。今日もいい天気だな」

上半身裸の“男”が、あくびを噛みしめながら暢気に挨拶をしてきた。

少し長い赤茶色の髪に濃い茶色の瞳をした青年　名をフィオン・エルナードという近所に住む少し年の離れた友人だが、なぜヤツがいまオレのベッドの上で、しかも上半身裸のまま寝ていたのか？まるで理解することができなかった。

断っておくが、オレにはそういう趣味はない。しかも昨夜寝た時は、間違いなく一人だったはずだ。にもかかわらず、なぜ？

「ん？　なんだよ、アレン。昨日はあんなに激しく求め合っただつのに。それにこう言う時は『目覚めのキス』をするのが普通だろ？」

「なにがだ、このクソ野郎があああっつっつ！！！！」

腹の底から絞り出した絶叫と共に、ヤツの顔面に渾身の力を込めた拳を叩き込んだ。

避けることもできず頭から床に転がり落ちた真性のバカ　この害虫野郎！　いったいどこから入り込んできやがったんだ！？

けどいまは、そんなことを詮索している場合じゃない。オレは慌てて洗面所横のトイレに駆け込むと、胸の奥から湧き上がってきた“熱いもの”を全て便器に吐き出した。

特にヤツの肌の温もりを思い出すと、あまりの気持ち悪さに卒倒してしまいそうだった。

「おいおい、どうしたんだよ？　アレン。まさか、俺の子を　」

『フ・ザ・ケ・ん・なツ！！』

あらんばかりの憎悪と怒りを込めてフィオンの喉を鷲掴むと、さすがに生命の危機を感じたのか「悪い。すまなかった」と謝罪の言葉を口にした。

「おい害虫。貴様いつたいどうやって侵入した？　事と次第によっちゃ、潰すぜ？」

「は？　なにを言ってるんだよ。昨日からベッドの中で　いや、嘘だ。正直に話しますから、殺さないでくださいいい」

オレが放つ殺気に怯えたのか、フィオンのヤツはあっさりと白旗を揚げた。

聞けば、部屋に入ってきたのはつい数分前のことらしい。

「いつものようにメシを作ってもらおうと思ってきたんだが、呼び鈴を鳴らしても出てこないし出かけた様子もない。仕事に行くには早すぎる時間だし、お前が出てくるまでドアの前で突っ立ってるのも馬鹿らしいんで、以前密かに作っておいた合鍵で玄関から入った」

「……ほオ」

「しかし居間はもちろん台所やトイレにもいない。風呂にも入っていない。さては寝坊でもしているのかな？　と違って寝室に来てみたら、案の定麗しの君が穏やかな寝息を立てているじゃないか。その表情を見つめていたら、なんかこうムラムラ〜と来るものがある

つてだな。ついつい君の褥に入り込んでしまったと言う訳なのだよ。あつはつは」

「なるほど。で？ 貴様の遺言はそれで終いか？ なら、今すぐ永遠の眠りにつかせてやる」

これ以上ないほど晴れやかな笑みを浮かべながら、喉を握り潰すべく渾身の力を込める。

「うぐあつ、おまつ。また握力上がったんじゃ　！？」

「黙れ。喋るな。息をするな。大気が汚れる」

「わ、わかつたわかつた！ 心から謝るし、合鍵も渡す！ それに朝っぱらから殺人事件を起こすなって！」

「つたく」

呆れてものも言えない。これ以上相手にするのもバカバカしいのでそつと手を離れた。

「それにしてもほぼ毎日年下のオレの所にメシをたかりに来るなんて問題があるんじゃないか？ お前には世間体とかプライドとか、そういうたものはないのかよ？」

「いまさらなにを言ってるんだ？ そんなものじゃ空腹は満たされねえしな。それに毎月多めに材料費を支払っているんだ。お前だつて助かつてる部分がないとは言い切れないだろ？」

確かにそうだけど……なにかが激しく間違っているような気がするのにはオレだけか？

「だいたいお前の作る料理がうますぎるのも原因の一つだぞ。冗談抜きでそんじょそこの料理人よりうまいものを作りやがって」

「人のせいにすんなよ」

とある事情によって一人暮らしを余儀なくされ、必然的に自炊するようになった結果だ。

それに自分で言うのもなんだけど、オレはかなりの偏食家だ。肉や魚の類が食べられないため、特に理由がない限り外食や買い食いという選択が選べないのも理由の一つに挙げられる。

「とにかく腹が減った。さっさとなにか作ってくれ」

もう限界だとも言うつようにフィオンが不満を口にする。駄々っ子が、この男は？ 厚顔無恥もここまで来ると怒りさえ感じなくなる。

「わかったよ。着替えたらすぐに行くから、大人しく居間で待つてろ」

「ほう？ 着替えとな。だったら俺も付き合っぜ。これ以上ないほど丁寧な手つきでお前の下着をぬ いや、やっぱやめておこごう。だからその拳を下ろせ」

「なら、さっさと行け！」

フィオンの尻を蹴り飛ばす。本当にウザい。ハエやゴキブリの方がまだ許容できるくらいだ。

(どこかで強力な殺虫剤売ってないかな)

本気で考えつつトイレの水を流し、入念にうがいをしたあと部屋に戻ったオレは着替えと仕事の準備を済ませて台所へ向かった。

テーブルの隅に置かれた旧型の立体映像出力装置が報道番組を流す中、朝食の準備を終えて席に着いたのだが、

「……毎度のことはいえ、相変わらず凄まじい食欲だな」

用意した朝食の九割を瞬く間に食い尽くされ、オレは紅茶を片手にげんがりしてしまった。

決して少ない量じゃない。確実に五人前は作ったはずだ。にもかかわらず、ものの数分で平らげるこいつの胃袋と神経はどうなっているのやら。

「そう言うお前は相変わらず小食だな。パンとサラダとヨーグルトだけなんて。そんなんじゃないや元氣出ねえだろ？」

「そんなことはない。むしろ今日はかなり食べた方だと思っぜ？」

もしもこいつが愚かな真似をしなければ、なにも食べずにいたはずだ。

なにより、あんな“夢”を見た後だ。落ち着いて食事なんかとれるはずがない。

「だいたいいつもは夕方頃にやってくるのに、今日に限って朝からやってくるなんて。いったい何があったんだ？」

「それなんだけどよ。実はお前に頼みがあるんだ」

「なんだよ？ 金なら貸さないぞ」

「アホ。俺は金を貸すのも借りるのも大嫌いなんだよ。貸して欲しいのはお前のバイクだ」

「言われ、オレは思わず「はあっ？」と素っ頓狂な声を上げてしまった。」

別にバイクを貸すことに抵抗がある訳じゃないけど、

「お前、仕事はどうするんだよ？」

今日は平日だ。当然のことながらオレもフィオンも仕事を抱えている。そう言うつと、

「実は午後六時から、北のガロシエ地区にあるコンサートホールでライブがあるんだ」

へっへっへくと、気持ちの悪い笑みを浮かべながらフィオンが理由を説明した。

「お前も知っていると思うけど、現在人気急上昇中アイドル『フィローラ』ちゃんのバースデーライブだね。ありとあらゆる手を使いまくってようやく自由席のチケットを手に入れたんだけどよ。いい席で見るためには早くから並ばないとマズいんだ」

「なるほど。だからこんな朝っぱらからやってきたって訳か。かなり距離もあるしな」

「まあな。それに本音を言えば昨日の夜から並びたかったんだが、噂によると午前七時以前に並んだヤツは強制的に最後尾に回されるらしくてな。おかげで寝不足だぜ」

「平日の上に近くに住宅もあるからな。そう考えれば妥当な措置だと思っけど……」

あくびを漏らすフィオンを横に、オレはわずかに表情を歪ませた。

「なんだよ？ お前も行きたいのか？」

「まさか。オレはアイドルに興味はないし、開場まで半日近くも並んで待てるか。そうじゃなくて」

まるで計ったかのように、連日都市を騒がせている一大ニュースの続報が流された。

「ほれ。丁度ニュースでもやってるだろ？」

顎で装置を差すと、つい先日大破した現場の映像が映し出されていった。

アナウンサーによると精密機械の部品を製造する工場らしいのだが、骨組みが剥き出しになっている上、周囲には今なおガラスや破片などが散乱したままになっている。

「『製造工程中に発生した事故』って報道してるけど、一部じゃ『テロなんじゃないか』って囁かれてるほどだ」

ここ一、二年の間に急増した凶悪事件。その目的や動機などは一切不明。場所や手口、関連性についても同様で、未だ市民の間に根強い不安が残されている。

「治安警備隊も懸命に捜査してるみたいだけど、尻尾さえ掴めないって言うじゃないか」

今年の五月にあんな出来事が発生した上、危険な事件が頻発している中、大勢の人間が一堂に会するようなイベントを開くなんてどうかしている。いったい主催者は何を考えているんだ？ というのがオレの偽らざる本音だ。しかしフィオンは、

「もしかしてアレンくんは、ボクのことになって仕方がないのかな？」

気色の悪い笑みを浮かべながら茶化してきた。これにはさすがにカチンと来た。

「お前、ふざけるのもいい加減にしろよ。オレは真面目に言ってるんだぞ？」

言つと、さすがに空気を読んだのか「みたいだな」と息をついた。「けどな、アレン。余計なお世話だったのは重々承知してるけどよ。」

他人の心配をする前に、自分の心配したらどうなんだ？」

「……どういう意味だ？」

「どうもこうもねえよ。いろいろ問題を抱えてるくせに。それに俺に言わせりゃ考えすぎだと思っぜ？ だいたいライブを標的にする理由がないだろ？」

「そうとも言い切れない。現に犯人は無差別とも言える行動をとってる」

不幸中の幸いとも言えはいいのか、あるいは女神フェリシアの加護によるものなのかは不明だけど、今のところテロによる死者が出たという話は聞いていない。

だからといって「次も安全だ」とは言えない上に、保障などここにもないのだから。

「なにかが起こってからじゃ遅いんだ。お前がどれほどライブを楽しみにしているかよくわかるけど、やめとけ。時期が悪い」

心の底から身を案じて言ったのだが、本人は「平気だつて」と根拠のない自信を覗かせた。

「そう言ってくれるのはありがたいが、絶対に大丈夫だつて。聞けば事態を重く見た女皇陛下が一部の反対を押し切る形で神衛騎士団に早期解決を命じたそうじゃないか。だったら犯人なんざすぐに捕まるさ」

「神衛騎士団、ね」

女皇直属のエリート集団にして“神皇国最大の切り札”

彼らはそれぞれ「従騎士」「聖騎士」そして「称号騎士」という位に分けられており、その数は百人にも満たない。本来彼らの役目は「女皇陛下並びに城内の警備」であり、事件の捜査や犯人逮捕などは軍や治安警備隊の役目だ。

だが、神衛騎士団はあらゆる分野に精通する優秀な人材を集めており、その性質上稀に本来の役目以外の任務を命じられることがある。今回もその例に漏れることはないだろう。

(けど、どうにも納得がいかないな)

如何せん対応が遅すぎる気がする。

いくら軍や治安警備隊が奮闘しているとはいえ、公式に発表された最初のテロ事件 薬物研究所爆破事件から一年以上が経過している。その間に被った被害は甚大で、国民の間に動揺が広がっている。

(だいたい、なぜ“いま”なんだ?)

理由はいくつも考えられるが「時すでに遅し」と感じているのはオレだけではないはずだ。

手を打つならとつきの昔に打っているはずだし、その判断を下すのが他の誰でもない。あの聡明なフィリア女皇となればなおさらだ。そこに引つかかるものを感じる上に、どう考えても悪い予感しかしてこない。

ただ批判的な感情とは裏腹に、フィオンが「平気だ」と言う気持ちもわからなくはない。

それはある意味において絶対に認めたくないことだけど、神衛騎士団には“あの男”がいる。

無数の難事件を解決し、わずか十五歳で闘技祭に優勝。その卓越した剣技から前女皇陛下より史上初めて神衛騎士団以外に称号《聖剣》を賜った救国の英雄。

あの男が女皇陛下の命を受けて事件解決に本腰を入れるのであれば、早期解決もあり得ないことではない。そう思う部分があるのも事実だ。

いずれにせよ情報が不足している以上、グダグダ考えたところで真相などわかるはずがない。

ここは素直に神衛騎士団の活躍に期待することにしよう。だが、「なあアレン。なんだったら神衛騎士団よりも早く、俺たちでテロリストを捕まえないか?」

突然フィオンがとんでもないことを言い出した。

「アホ言っな。オレはごめんだ」

「でも、この間だってなんだかんだ言いながら結局うまくいっただ

る？ なら今回だって」

「そう思うなら、お前一人でやれよな」

どうやらフィオンは、以前オレたちの手で連続窃盗犯を逮捕した時の興奮と衝撃が忘れられないらしい。

表向きは神衛騎士団が解決したと公表されているけど真相は違う。不運と偶然によって事件に首を突っ込むことになってしまい、やむなく解決のために奔走した結果にすぎない。

オレとしては一刻も早く忘れたいし二度とあんな思いはしたくない。

「おっと、悪いな。そろそろ時間だ。悪いけど俺は行くぜ」

時計を見ると、既に六時半を回っている。どうやら止めてもムダのようだ。

オレは溜息をついたあとポケットからバイクの鍵を取り出し、フィオンに手渡した。

「くどいようだけど、本気で気をつけるよ。それともう一つ。先日車検を済ませたばかりなんだからな。絶対に傷なんか付けるなよ？」

バイクはオレの数少ない趣味の一つだ。フィオンの身の安全もそうだけど、それ以上にバイクが無事に返ってくるのか？ 不安を感じずにはいられない。

「わかつてるって。それにもしものことがあつたら身体で返すから心配すんな」

そう言うわりに、やたらニヤニヤしているのはなぜなんだ？

(まさかこいつ、わざと傷つけるつもりじゃないだろうな？)

これまでこいつが犯してきた様々な奇行蛮行を考えると、充分にあり得る話だ。オレは一瞬鍵を渡したことを後悔したが、

「ならいいさ。お前の内蔵は高く売れそうだしな」

真面目な顔で釘を刺すと、フィオンは頬を引きつらせながら「…

…気をつけます」と固い声で返事をした。

## 第一章「光と影の楽園」(1-2)

ヘルメットを被り、バイクに乗って颯爽と出かけていくフィオンを見送ったあと、食器などの片付けを終えたオレは時計を見つめながらどうするか思索した。

出勤時間までかなり余裕がある。急ぐ理由はないが、さりとて他にやらなければならないことがある訳でもない。十数秒ほど考え込んだが、結局戸締まりを確認したあと外へ出た。

(せっかくだし、のんびり歩きながら店に向かうことにするかな) いつもはバイクかバスを使うのだが、たまには徒歩で出勤するのもいいだろう。

空を見上げると、今日も初夏らしい群青色の空が広がっていた。

風も爽やかで胸一杯に空気を吸い込むと日頃の心労が薄れていくような、そんな感覚さえ感じてしまう。

ただ、本音を言うと少し複雑な部分がない訳でもない。

ともすれば忘れてしまいがちになるけれど、この国は海面からおよそ四千メートルもの上空に存在している。地上部分の面積がおよそ九千ヘクタールにも及ぶ巨大な島が、だ。

オレは生粋の神皇国人なので、外の世界についてはあまり詳しくない。けれども常識で考えればまず気圧の問題が生じるだろうし、気温や天候の影響を無視することはできない。

また、これほどの大質量をどのように浮かせているのか？ 落下する危険はないのか？ 疑問や不安に感じても不思議じゃない。

そもそもこの国には「理力」と呼ばれる魔力に近い、それでいてより洗練されたエネルギーを活用した「フォリア・テクノロジ理導技術」と呼ばれる技術が存在する。

一般的には、それまで当たり前のよう存在していた様々な知識 例えば魔法、魔術、錬金術、科学、化学、工学などあらゆる知識を取り込んだ上で再構築した新しい学問のことだ。

その土台を支える「理力」<sup>フォース</sup>とは、地上で産出される「鋼魔石」と呼ばれる石から発生する魔力を効率的に抽出・増幅させたあと精製することによって活用することができるようになる。

基本的にほぼ同じものと思ってもらって構わないけど、唯一両者の間に絶対的な違いがある。

それは「魔力と違い、液体化することが可能」という点だ。この違いはあまりにも大きい。

また、理導技術そのものも日々進化の一途を辿っている。

例えば今年から本格的な運用が始まったものの一つに「気象制御システム」が挙げられる。

季節によって多少変化が出るものの、このシステムのおかげで一年を通して快適に過ごせるようプログラムされているし、植物や農作物に影響が出ないよう地区ごとに天候を自在に変更させることができると言っ。

この都市が宙に浮いていられるのも「重力並びに空間制御技術」があるおかげだし、他にも「都市防衛機能」や「農作物自動生産システム」などが存在するため、生涯を通して安全で快適な生活が約束されている。

まさに女神の寵愛と理導<sup>フォリア</sup>の恩恵を一身に受けた空の理想郷 ても、

(この国は、本当に“平和”なのかな)

あまり深く考えたくない重い問題だけど、どうしてもそんな疑問を感じてしまう。

実際テロなどというあまりにも愚かで卑劣な犯罪に手を染める者が実在する上、他にも神皇国自身が抱えている問題がある。

中でも近年特に問題視されるようになって来たのが「自殺者並びに凶悪犯罪者の増加」だ。

これは別にいま始まったものではなく、神皇国建国以来 約五十年ほど前に天空に浮かび上がって以降常に上層部の頭を悩まし続けてきた問題でもあり、その都度対策が為されているものの未だ有

効な手段が確立されていない。

また、オレ自身「狂っているのではないか？」と思うような事例として、昨年発生した前代未聞の事件について触れておく必要があるだろう。

忘れもしない、去年の五月十二日午前六時四十二分。突如数万にも及ぶ有翼魔獣が神皇国を襲撃。直ちに戦闘態勢が敷かれ、国民全員に外出禁止令が出される事態に陥った。

後に『五日間戦争』と呼ばれるようになった最初の日。一部の魔獣が都市内部に進入。市街戦を余儀なくされ、さらに攻め寄せた敵の数が多すぎたため後手に回らざるを得ないという事態に誰もが動揺と困惑を隠しきれなかった。

それは市民も同じはず。最悪の場合暴動に発展するのではないかと懸念されたが、実際には一部で多少の混乱が見られたものの暴動などの類は発生しなかった。

なぜか？ オレには見当もつかなかったけど、聞くところによると「軍や治安警備隊、神衛騎士団がなんとかしてくれる」と大半の住民が思っていたからだと言う。

元々対空専用の防衛機能が備わっている上、事件発生翌日には最新フォリア・ウエボンの理導兵器まで投入した。

いくら数が多いとはいえ負けるはずがない。実際、事件は一週間もしないうちに勝利という形で決着がついてしまった。

誰もが「勝つて当然」と思っていたからこそ暴動の類は発生せず、一部では「適度な娯楽」として受け止められてしまったと知った時、オレは初めてこの国の“異常さ”に気がついた。

無論これは極端な例だし、オレのように不安を感じていた者も多かったはずだ。

後に終息宣言が出されるまで気が休まらなかったし、もしも襲ってきたのが魔獣ではなく、魔族や竜族といった上位種族だったらそう考えると震えが止まらない。

他にも数え切れないほどの問題を抱えている事実を考えれば、決

して安穩としていることはできない。いくら防犯用の機甲兵が治安を維持し、さらに最近都市部に住む若者を中心にサイコセラピーが人気を集めているとはいえ「根本的な解決」と言うにはほど遠い気がする。

（あまりにも進みすぎた技術、か）

ふと信号で足を止めると交差点の真上に、先ほどフィオンが口にしていた人気アイドルのフィローラが新曲を披露している映像が映し出されていた。

これは空間投影技術を応用したもので昨今では飛躍的にその精度が増し、非常に鮮明で現実感のある映像を映し出すことができるようになってきている。

また周囲を見渡すと、最新の携帯端末でこの場にはいない人間と会話する者や情報を検索する者などが当たり前のように存在しているし、人や物を瞬時に所定の位置に移動させることができる「空間転移装置」の普及も進んでいる。

いったいこの国は、どこへ向かおうとしているのか　不安にも似た気持ちを抱きながら歩いていると、背の高い建物の影に隠れるようにして建つ古風な石造りの建物が見えてきた。

軒先に《レイル武具商店》と書かれた木製の看板をぶら下げているその店は昨年の夏からお世話になっていて職場であり、この広大な浮遊都市の中でたった五件しかない武具販売店だ。

「おはようございます、ザレスさん」

いつものように裏口から入ったオレは、カウンターで新聞に目を通していた大柄な男に挨拶をした。名をザレス・レイルという巨石のような体躯をした狼型の獣人族　目つきは刃のように鋭く、全身から醸し出される存在感は普段接しているオレでさえ圧倒されることがある。

けれども実際に話してみると気さくで人当たりも良く、面倒見もいい。なにより武器職人としての腕は見事と言う以外他に言葉が見つからないほど優れている。

昨今理導技術を駆使した様々な武具や兵器が開発され、次々と兵や騎士たちに支給される中、未だに潰れることなく店を維持し続けることができるのは、彼とその父である親方の腕の良さが神皇国中に轟いているからだ。

そもそもこの国において「武具屋」ほど、国民に不要な商品を扱う仕事も珍しい。

先ほども述べたように大小様々な問題を抱えているとはいえ、基本的にこの国は平和だ。

何か問題が起こっても治安警備隊などがなんとかしてくれる。

それ故に一般人が武器や防具を持つ必要がないため、通常では見向きもされない。

しかし、だからといって「武具屋がなくても困らない」と言うことはない。テロなどの凶悪事件や五日間戦争などの件もある。また理導兵器は確かに便利で高性能だけど値が張る上に製造に時間がかかり、さらには日頃のメンテナンスが大変という欠点もある。

「今日はずいぶん早いな。なにかあったのか？」

新聞を折りたたみながらザレスさんが珍しそうな表情を浮かべる。当然だ。いつもより二十分ほど早く来たのだから。まさか本当のことを話す訳にもいかず、オレは苦笑いを浮かべながら「早く目が覚めただけですよ」と述べるに留めた。

「それより、アレン。この間の話なんだがな」

不意にザレスさんが、言いにくそうな表情を浮かべながら話を切り出してきた。

「別に急かすつもりはないんだが、親父が『早く確認しろ』ってうるさくてな」

「親父が、ですか？」

「ああ。どうやら親父は一日も早くお前を一人前の武器職人にしたいらしくてな。年も年だし、その気持ちはわからなくもないが」

複雑そうにザレスさんが言う。

「お前には才能があるし頭も良い。人柄や性格だっていいし、なに

よりお前の剣の腕は」

「ザレスさん」

オレは強引にその言葉を切った。自分でもそれと判るほど、言葉に怒気が込められている。

さすがのザレスさんもほんの一瞬表情を変化させた。だが、

「……ごめんなさい」

我に返ったオレはすぐに謝罪の言葉を口にした。武器職人がどうか言う以前に、可能な限り“いつもの話題”に触れたくないからだ。しかし、

「まったく。この話題に関しては本当に短気だな。聞けば最近仲間といるいろやっっているようだから、少しは自分と向き合う覚悟ができたのかと思っただが」

首を左右に振りながら、呆れたように溜息をついた。

「俺は別に嬢ちゃんみたいなことを言うつもりはないし、なにをどうするかはお前自身が決めればいい」

「だがな、と言葉を匂切ったザレスさんはオレの目を見つめながら、あの事件から一年半になる。そろそろけじめを付けたらどうなんだ？」

諭すように言った。オレは少しの間なにも言えずにうつむいていたが、

「……うるせエよ」

全身を駆け巡る激情と共に、オレは場も相手も忘れて声を張り上げた。

「これはオレ個人の問題だ。余計な口出しをするんじゃない！」

強い感情を込めて睨み付けたが、巨軀を誇る獣人は動じない。

「凄めば相手が怯むと思っっているのか？ いや。そうやって現実から目を逸らし続ければ、いつか時間が解決してくれると本気で思っているのか？ 確かにお前の境遇には同情する。例の病気のことを含めてな。だが俺に言わせれば、お前はただ逃げているだけだ。その様でこの先どうするつもりなんだ？」

「ンなこと、あんたに言われるまでも　　がつ!？」

突然目の前で火花が散った。

いや。正確に言うのであれば、頭に固い物を叩きつけられた。

頭を抑えながら振り向くと、そこには二人の女性が立っていた。

いずれもよく知る人物だ。

一人は煌めく金色の髪に赤い瞳をした長身の女性だ。まさに場違いと言ってもいいほど整った顔立ちをしているが、下腹部の辺りが大きく盛り上がっている。

確か妊娠七ヶ月だったはずだけど、そんなことよりもオレはその瞳に意識を縛られた。

まさに“燃えるような”内面の感情を表しており、思わず身を固くした。

ザレスさんの妻であり、火の精霊人。フォティアさんだ。

「まったく。朝っぱらから何をしているの？　特にアレン。目上の人に向かってなんて口の利き方をしているの？　いつもの礼儀正しいキミはいったいどこへ行ったのかしら？」

両腕を組み、フンツと鼻を鳴らす。どうやらかなり怒っているようだ。

でも、オレは謝らない。オレは悪くないからだ。無言のまま睨み付けたが、

「　少し話が聞こえてきたからおおよその事情は飲み込めたけど、旦那の言うとおり少し短気すぎると思わないの？　まるつきり駄々っ子じゃない」

言われ、言葉に窮してしまった。まったく以てその通りだからだ。「だいたいこの話題に関しては、わざわざあたしたちが口に出して言うまでもなくキミが一番よくわかっているはずじゃない。違う？　違うはずがない。内心そう呟いたが、感情は未だ収まる気配がない。

い。  
(オレは……オレだって、本当は!)

悔しさにも似た気持ちを押し止めるように奥歯を強く噛みしめて

いると、

「でもね。その一方でキミの気持ちも理解できる」

フツと力を抜いたように、フォティアさんが穏やかな声で言った。  
「キミが抱えている問題は、あたしたちが考えている以上に繊細で複雑なものなんだろう。それは理解しているし、いつかキミが自分の足で立てるまで見守ってあげたい。応援したいって気持ちもある」  
思いがけない優しい言葉に、オレは呆然と口を開いた。

「だいたいあんた。前にアレんくんの問題について話し合った時、じっくり様子を見ながら解決していこうって決めただけだと思っけど。まさか忘れたとは言わせないわよ？」

「え？ いや、いや。確かにそうだが」

矛先を向けられたせいかわ、ザレスさんが動揺の色を露わにする。

「それにこれはアレんくん自身の問題なんだから、安易な気持ちで深入りするのはルール違反だわ。あたしに言わせればまだ二年も経っていないし、なによりアレんくんはまだ十七才なのよ？ もう少しくらい待ってあげてもいいと思うけど？」

「だがな」

「皆まで言わなくてもいいわ。それに立ち位置としては、あたしはあんた寄りよ。確かに複雑な事情があるけれど、いつまでも同じ場所に留まっただけでは先に進めないでしょう？ そしてそう言った思いがあるからこそ、最近少しずつお友達と動いているんでしょ？」

オレはなにも言わず、黙って視線を逸らした。

「ま、最終的に結論を下すのはキミ自身なんだし、いまここで答えを出す必要はないでしょ？ わかったらさっさと開店の準備をすること。そしてあんたはさっさと鍛冶場に行きなさい」

言われたザレスさんは、無言のまま裏口から出て行った。

「ほんとに世話が焼けるわね。もう少し大人になったらどうなの？」

「でも、オレは」

「あーあー、なにも言わなくてもいいわ。あたしも旦那もキミが本当に望んでいるものがなんなのか知っているしね。お義父さんの提

案だつて、半分以上はハツパをかけるつていう意味合いの方が強いと思うし」

だろうな、と心の中で付け加えた。

(でも……)

絶対に口には出せないけど、正直「余計なお世話」だという気持ちがある。

この人たちがどんなに「理解できる」と言つたところで実際その場にいた訳じゃないし、あんな光景を見せつけられて正気でいられるはずがない。

時々なにもかも忘れて「オレのことなんか放っておいてくれ！」と叫びたくなることもある。

けれども、強くそう思う一方で深い感謝の念があるのも事実だ。

時に優しく、時に厳しく　本当の家族か、それ以上に接してくれる。

それがどれだけ心の支えになっているか　謝るつもりはないけど、近いうちにお礼を言う必要があるだろう。

「ところでフォティアさん。時間は大丈夫なんですか？　病院、混んじゃいますよ？」

「……へえ。少しは頭が冷えたみたいね。毎度のことだけど、よくあたたたちが病院に行くつてわかつたわね」

大したことじゃない。種明かしをしようとする、それまで影に隠れるようにしていた小柄な少女がひよこつと顔を出した。

名をレーメと言う、ザレスさんとフォティアさんの愛娘だ。

母親譲りの黄金の髪に犬のような耳。フサフサとした愛らしい尻尾。そして清んだ大空のような青い瞳をしている。

言うまでもなく「混血種」だけど、レミアア神皇国においては別に珍しいことでもなんでもない。むしろオレのような「純血の人間族」の方が少数派だ。

「時間やフォティアさんの状態。加えて外出着の上にレーメが付き添っている以上他に考えられませんかからね」

買い物だったらオレが行くし、なにより精霊人は人間族よりも出産にかかる日数が短い。その伴侶が獣人ならなおさらだ。

具体的な日時まではわからないが、もうまもなく生まれてくるはずだ。場合によっては入院を勧めた方がいいかもしれない。

「それよりごめん、レーメ。嫌なところを見せちゃって」

片膝を床に付けながら言うと、レーメは「ううん」と首を振った。

「それより、アレンお兄ちゃん。今朝おじいちゃんが『いい加減、例の物を持って帰れ』って言ってたよ？」

「そっか。ありがと、レーメ」

そつと頭を撫でると、レーメは嬉しそうな表情を浮かべながら尻尾を振った。

正直に言うと、このまま店に置きっぱなしにしておきたいんだけど、

「いくらなんでも『忘れてました』って言い訳は苦しいと思うわよ？ 別に『使え』とは言わないけど、あれはキミの物なんだから大切にしないさね」

そう言われては、持ち帰らざるを得ない。帰りにカーテンを買いに行こうと思っていたのに、余計な荷物が増えてしまった。

（まあ、カードは財布の中に入れておけばよしだから、万が一見咎められても問題ないけど）

あまり持ち歩きたくはない代物だ。むしろさっさと処分してしまいたいのに。

「さて。それじゃお店の方はお願いね」

言うと、レーメと共に店から出て行った。オレは少しの間その後ろ姿を眺めていたが、

「……開店の準備しないとな」

壁に掛けていた緑色のエプロンを身につけ、店内の掃除に取りかかった。

## 第一章「光と影の楽園」(1-3)

こんな事を言うと誤解を招いてしまいかも知れないけど、基本的に武具屋はヒマだ。

もちろん忙しい時はとことん忙しいけど基本的に顧客が決まっている上、そもそも免許や許可証のない人間は武器を持つことさえ許されない。

例えばそれがショートソードであったとしても振り回せば脅威になるし、場合によっては人を傷つけ死に至らしめることがあるからだ。「所持・運搬許可証」を得るには複雑な手続きが必要だし、免許となると厳しい審査に加えて半年に及ぶ講習を受けたあと、テストに合格しなければならぬ。

そうまでして購入・所持する理由と必要性がない市民にとって武器などという物は無用の長物であり、必然的に購入者や業務も限定されると言う訳だ。

ただ、だからといって「仕事がない」ことはない。

オレの仕事は主に「武具を売ること」だけど、そこには様々な付帯義務が生じる。

商品の管理をはじめ契約している運送会社に配達を依頼したり、伝票や書類を法律に基づいて処理したり、場合によっては簡単なメンテナンスを行うこともある。他にも新製品の宣伝や、素材や製造法の違いを伝えるために勉強して知識を身に付ける必要がある。

しかし勉強は日頃から行っているし、溜まっていた伝票の類は昨日のうちにすべて片付けてしまった。掃除も毎日欠かさず行っているし、今日は珍しく雑用もない。

(観葉植物には水をやったし、備品の補充も完了)

本当に退屈で退屈で仕方がなかった。

さりとてお金をもらっている以上、なにかしていないとザレスさんたちに悪い。

そもそもオレは、レイル家の面々に多大な恩がある。

オレみたいな訳ありを雇い入れてくれたばかりか、家族同然に接してくれる。さっきの件だってオレのことを思ってくれているからこそだ。

(でもなあ。本当にやることがないんだよなあ)

忙しすぎるのは困るけど、ヒマすぎるのも困る。

さりとして店を空ける訳にはいかないし、こうなったらザレスさんが残していった新聞でも読むかな。電子情報が主なこの時代、紙でできた新聞にどれほどの価値があるのか疑問に思うことはあるけれど、なにもしないでいるより遙かにマシだろう。

しかし、オレは新聞を読むことができなかった。

扉に付けられたベルが小気味よい音を発したため、オレは反射的に顔を入り口の方に向け、

「いらつしやい！……ませ」

元気よく挨拶をしようとしたが、自分でも露骨に思えるほどトーンダウンしてしまった。

案の定、訪れた客の表情は嫌悪感に満ちあふれていた。

「なによ？ この店の店員は、挨拶一つ満足にできないのかしら？ そんなことでよく販売員が務まるものね」

悪意のようなものさえ感じられる少女の言葉にほんの一瞬頬が引きつるのを感じたが、正規のお客様である事実には違いない。オレは一つ咳払いをしたあと、

「大変申し訳ございません。ようこそお越し下さいました、イリア様」

今度はいつもと変わらない態度と表情で、訪れた客を出迎えた。

意志の強さと純粹さを併せ持つ碧の瞳、白いリボンでまとめられた滑らかな薄茶色の髪、そして思わず人目を惹く赤を基調とした鎧と左腕に填められた腕輪には、それぞれ神皇国を象徴する《風と竜の紋章》が刻み込まれている。

中でも「アルマテイヤ導力鎧」と呼ばれる特殊な鎧には最新のフォリア・テクノロジ理導技術がふん

だんに盛り込まれている上、身体能力などを引き上げる機能も備わっていると言う。

例えばイリアは神皇国の中でも卓越した槍の使い手として知られているが、武器の特性上持ち歩くのは困難だ。

しかしその問題を解決したのが理導技術であり、左腕の腕輪と言う訳だ。詳しい原理は不明だけど、長さ三メートルほどの槍を自在に出し入れすることが可能らしい。

また、彼女は騎士団の中でもたった五人しかいない『称号騎士』の一人だ。つい先日彼女に与えられた《晨星<sup>せいしん</sup>》の称号が示すように、星の煌めきを思わせるようなしなやかな強さと美しさ、気高さを漂わせていた。

けれど、ここだけの話。オレは彼女のことが苦手だった。

別に「嫌い」と言う訳じゃないけど、様々な理由があるため可能な限り顔を合わせたくない人物の一人であることは確かだ。それに「わざわざこのようなむさ苦しい場所に足を運んでいただき、誠にありがとうございます。それで本日はどのような御用件でしょうか？ まさかとは思いますが、性懲りもなく“例の話”をするためにいらっしやうたと言うのであれば、誠に申し訳ございませんが強制的にお帰りいただくことになりましたが」

言った途端凶星を指されて驚いたのか、ほんの一瞬だけ目を丸くした。しかし次の瞬間、

「ほんつとに気に入らないわ！ みんなに『この店の店員は接客態度がなっていないから、利用するのはやめた方がいい』って言いふらしてやるうかしら！」

柳眉を逆立てて言う。小さい頃からまったく言っていないほど変わっていない。こういうところは可愛らしくて好きなんだけど、「忙しいくせに、いったい何をしに来たんだ？ まさか昔みたいに『犬のミリアーテがいなくなっちゃったから、一緒に探して！』なんて言わないよな？」

「……いつの話をしてるのよ？ それにミリアーテにはきちんと発

信器付きの首輪を付けているから、探そうと思えばすぐに探し出せるわ。そんなことより」

イリアはわざわざ咳払いをしたあと、

「アレン。これまで幾度となく伝えてきたけど、いい加減神衛騎士団に戻りなさい」

瞳に強い意志を込めながら、いつもの台詞を口にした。

オレはしばしの間イリアの目を見つめながらどう返答しようか迷ったが、結局いつものように「断る」とできる限り感情を込めて言い返した。

「用件はそれだけか？ なら、さっさと帰ってくれ。いつものようにくだらない問答で、時間と精神力を無駄にさせられてたまるか」吐き捨てるように言ったのだが、この程度で諦めるような性格はしていない。それどころか、

「それは私も同じよ。これ以上アレンの我が侭に付き合うつもりはないわ。それに状況が変わったの。どうしても言うのであれば、どんな手段を用いても従ってもらわう」

片手を腰に当てながら、いまにも飛びかからんばかりの氣勢を込めて言う。

「仮に戻ったとして、周囲に対してどう説明するつもりだ？ オレが犯した罪はそう簡単に償えるものじゃない。なによりお前自身の気持ちはどうなるんだよ？」

「私個人の感情なんて、この際どうでもいいわ。それに同じ様な事を何度も言わせないで。言ったでしょ？ 『どんな手段を用いても従ってもらわう』って。場合によっては“皇女”としての権力を振りかざしても騎士団に戻ってもらわうよ」

言われ、オレは驚愕のあまり息を飲んだ。

そう。いま目の前に立っているのは《晨星》の称号を持つ神衛騎士であると同時に、この国にたった一人しかいない次期皇位継承

者だ。

イルシエラ・フィール・フォン・レミア　その彼女が“神皇国”という土台の上で「時期女皇」としての権力をなりふり構わず振りかざせば、確かに大抵のことはまかり通せてしまっただろう。

なぜなら頂点に立つ女皇は、国民から神の言葉を授かる“預言者”と見なされている。

その権力は絶大であるが故に、イリアの肩書きは決して軽くはない。が、

（おかしい。いつものイリアじゃない）

あの事件の直後。数々の前例を打ち破り、無理と我を通して神衛騎士になっただけだから歴代の皇族の中でも飛び抜けた変わり者なのは前々から承知していたけど、だからといってこんな強硬な手段を用いるほど滅茶苦茶な人物でもなかった。

各方面からの反発は必至。それどころか場合によっては皇位継承権さえ剥奪される可能性がある。そんなことは本人が一番よく理解しているはずなのに。

「……とにかく、座ってくれ。いまお茶を用意するから」

どうやらただごとではないらしい。

言つとイリアは「そうさせてもらっわ」と、席に腰を下ろした。

オレは給湯室で紅茶の用意をし、輪切りにしたレモンを添えたカップを差し出すと、イリアは優雅な手つきで口を付けた。

「いい香り。相変わらず紅茶を淹れるのがうまいわね。葉もいい物を使ってるみたいだし」

「それなりにこだわりがあるからな。で？　いったいなにがあったんだ？」

話を促したが、迷いがあるのかイリアは少し間を置いた。

「これから話すことはくれぐれも他言無用に願っけど、実を言つとこのままにも手を打たなければ、あと半月以内でこの神皇国が墜ちるそうよ」

低い声で　だが、はつきりとした口調で言った。

しかしオレは、イリアの言葉を理解するのに長い時を要してしま  
った。

あまりに非現実的すぎて、理解する能力が追いつかなかったから  
だ。

「……なんだって？ このレミリア神皇国が、墜ちる？ しかも半  
月以内に？」

即座に「冗談だろ？」という言葉が出かったが、わざわざそんな  
冗談を言いに来るほど彼女はヒマでもなければ意地の悪い人間で  
もない。オレは瞬時にその言葉の意味を理解した。

「それほどまでに追い詰められているのか？ テロリストたちに？」

「ええ。残念だけどここ一、二年の間にやられ放題だわ。そして巷  
でも噂されていると思うけど、四日前の精密機器工場爆破事件。あ  
れもテロリストの犯行よ。もっとも世間への影響を考慮して『事故』  
という形にさせているけど、人の口に戸は立てられなくてね」

「犯行声明は？」

「これまでと同じく、出されていないわ。けど、連中はどういう訳  
か次々と重要な施設を破壊し続けている。しかも中には、本来なら  
関係者以外誰も知り得るはずのないSランクのデータベースに記載  
された施設もあるんだけど……」

「それにもかかわらず、か」

この場合軍や治安警備隊グアルディア・シビルの無能さを非難するべきか、テロリスト  
たちの能力を評価すべきか大いに迷うところだ。

「内通者の可能性は？」

「もちろん真つ先に疑ったけど、どんなに調べても容疑者は浮かん  
では来なかったわ。それにSランクの情報に関してはセキュリティ  
体制も完璧だし、そもそも外部から切り離されている。ハッキング  
など外部からの侵入という線は考えられないわ」

「そうは言っても、実際に情報が漏れている点は無視できないだろ  
？」

「ええ。だから引き続きその線に関してはレクスに任せているけど」

この様子だと時間がかかりそうな雰囲気だ。

「でも、聞くところによると先頃女皇陛下が神衛騎士団に対して正式に事件解決を命じたんだろ？ それまでどうだったのかは知らないけど、あらゆる権限を使えば犯人を割り出すことくらい造作もないことなんじゃないか？」

言ったが、イリアに凄い目で睨まれた。

「……ほんと。ちょっと見ない間にずいぶん性格が悪くなったわね。わざわざそんなことを聞かずとも、アレンなら気付いているんじゃない？」

言われ、オレは心の中で舌を出した。

薄々「おかしい」とは思っていたけど、やはり公式に命令を下す遙か以前から神衛騎士団に対して事件の解決を命じていたのだ。

「でも、そう聞くとますますオレの出番なんてなさそうに思えるんだけどな」

「そうかしら？ 前に連続窃盗犯を捕まえた時だって、アレンのおかげで犯人を逮捕できたようなものじゃない」

「あれは単にオレが推論を展開した上で指示を出しただけだ。オレ自身は特になにもしていないし、捕まえたのは純粹にイリアとフィオンの実力だろ？」

「それ、謙遜しているつもり？ 私に言わせればアレンがいなければ私たちの出る幕なんてどこにもなかったわ。事件の構図だってアレンだからこそ解けたようなものだし、少なくとも私自身はアレンの能力を高く評価しているわ」

「……どう考えても『過大評価』だと思うけどな」

「なら、一つ問題を出しましょうか？ 例えば……そうね。なぜ女皇陛下はこのタイミングで私たちに対して正式に事件解決を命じたのかしら？ 既に水面下で命じておきながら、わざわざ世間に公表する意味はどこにあると思う？」

「いくつか考えられるけど、一つは周囲や国民からの突き上げが酷いからだろ？」

いったいどれほどの人間が神皇国の危機について実感しているかは不明だけど、凶悪事件の数は未だ増加の一途を辿っている上、犯人に対する有力な情報が得られたという話も出てきてはいない。

その事実には不安や不満を感じない者がいないはずがない。

どうしたって「責任問題」に発展するのは目に見えているし、このまま放置すれば暴動が起こる可能性もある。

ならば当面の間だけでも人心を安心させるために神衛騎士団の名を出したのだろう。

「そしてもう一つ。この状況で正式にアナウンスしたと言うことは、裏を返せばいよいよ状況が差し迫ってきている証とも受け取れる。なにせイリアがオレみたいが無能者の所に足を運ぶくらいだ。どれほど現場が切羽詰まっているか容易に想像が付くし、なにより犯人に繋がる有力な手がかりは掴めていないんだろ？ だとするならば、当然『最悪のパターン』だって視野に入れておくはずだ」

もしも神衛騎士団が、このまま結果を出せずに時間だけが過ぎてしまったら そんなことになったら、もはや収拾の付かない大混乱に陥るのは目に見えている。

なにせ神衛騎士団は国民にとってある種の“希望”であり、数々の実績があるからこそその名を出すことによって人心を安堵させるという手段が打てるのだ。

しかし、成果が上げられなければ希望は失望に変わり、最悪の場合絶望へと変貌する。

「一定の効果はあるかも知れないけど急場凌ぎでしかない。ただの時間稼ぎだ。そして陛下の性格を考えた上でなおもこんな手を使つたと言うことは、そうでもしなければ現状を乗り越えられないほど苦境に立たされているからだろ？ そうじゃないと辻褃が合わない」

「そう言うこと。私がおここに来た理由もわかるでしょ？」

本当に余裕がない。だからこそなりふり構ってられない 言葉にこそ出さなかったが、痛いほどイリアの心情を理解した。しかし……

「なによ。この期に及んでまだ協力を拒むって言うの？」

「どうするか決めかねているのは確かだけど、オレが気にしているのは陛下の決断だ」

「どういうこと？」

イリアが疑問を挟んだが、オレは口元に手を当てたまま思案した。と言うのも決定的な情報がないため、自分の考えに自信を持つことができないからだ。

「いまさら口に出して言うことじゃないかもしれないけど、陛下の政治的手腕は歴代の女皇の中でも群を抜いて優れている。しかも非常に聡明な方だ。だからこそこの時期に神衛騎士団に対して事件解決を命じた“本当の理由”がわからない」

あの時以来顔を合わせてはいないけど、陛下の考えそうなことはなんとなく理解できる。

例えどんな状況に陥ろうとも、決して迂闊うかつな手段を採るような人じゃない。

（だからこそ、早期に事件を解決できなかった時の対応方法を考えていないはずがない）

しかしいまの状況では、とてもそんな秘策があるようには思えない。

既にある程度事件や犯人の目星が付いているならともかく、イリアによると手がかりすらろくに掴めていないと言う。

もちろん、そこから導き出せる答えはいくつかあるし、強引でも構わなければ当面の危機を回避する術もある。

だが、どれも実行には困難を伴う上に場合によっては正気を疑われてもおかしくない。ある意味“妄想”と言ってもいい考えを言葉にする訳にはいかない。

「それより、オレにいったいなにをやらせるつもりなんだよ？」

まさか「犯人を捕まえて」などと言いつ出しはしないだろうな？

もしそんなことを言うようなら、今すぐにもイリアを病院に連れて行く必要がある。

しかしイリアは無言のままポケットから一枚の写真を取り出すとテーブルの上に置いた。手に取って見ると、そこには一人の人物が写し出されていた。

（かなり若いな。オレたちと同じ年ぐらいか？）

ミルクのようになめらかな肌に白い短髪。そして鮮やかな紫色の瞳をしている。

「事件に直接関係があるかどうかはわからないんだけど、先の爆破事件の捜査中偶然工場内の防犯カメラに映っていてね。一応調べてみたんだけど」

名前や年齢、種族、出身区域、血液型、学歴、職歴など一切不明なのだと言う。つまり、

「……データベースに登録されていなかったのか」

言うと、イリアは大きく首を縦に振った。

原則この国に住む者は全員データベースへの登録が義務づけられており、当然そこには年齢や性別、種族や出身地区などはもとより血液型や学歴などの個人情報も記録されている。

例えばオレの場合、生年月日などの情報以外に「第一種車両運転免許（主にバイクや小型自動車）」と「第三種武器携帯免許」という二つの免許を持っているけど、そうした情報をデータベースに登録する代わりに国から「Eカード」と呼ばれるカードが支給される仕組みになっている。

このカードがあればほぼ全ての行政サービスを受けることができる上に、一部商品の支払いをすることも可能だ。

逆に言うとカードがなければこの国で暮らしていくのは困難だし、仮に警備兵などから職務質問を受けた際、カードの提示を拒んだり十三桁の個人番号を提示することができなければその場で逮捕されてしまう。

それは「外から来る者」も例外ではなく、入国の際に検査・登録が絶対条件になっている。

他にも万が一の事態が発生した際すぐに対応できるよう様々なシ

ステムや体制が構築されている訳だけど、そのデータベースに情報が記載されていなかったと言うことは、

「密入国の可能性が高いな」

言うと、イリアは首を大きく縦に振った。

「特にシエイルなんかは『作業員の可能性がある』と言うけど私も同感。一応治安警備隊や軍にも調べてもらっているけど、アレンには私たちとは違う目線で調べて欲しいの。私たちでは気づかない“なにか”に気づくかもしれないし」

「そんなことを言われてもなあ」

オレみたいな一般人が手に負える話じゃないような気がする。

そもそもこの人物が密入国者だと仮定した場合、真っ先に思い浮かぶのは「入国方法」だ。

普通この国に来るためには『<sup>ゲート</sup>転移門』と呼ばれる特殊な装置を使い、文字通り「転移してくる」以外方法はない。

その際厳格な審査が課せられるし、密輸入などの不備があつては取り返しがつかなくなるので常に最新の設備が導入されている。

また理論上転移門を使わず直接外からやってくることも可能だけど、事前に許可がない場合軍や『<sup>ウイングス</sup>都市防衛機能』によって問答無用で撃墜される。

故に「飛行機」や「竜など有翼生物の背に乗ってくる」などという方法は不可能な上、国全体を包み込むような形で強力な結界が張られているため個人レベルの魔法や魔術などは論ずるに値しない。

だからこそどうやってこの国に入国し、どれほどの期間潜伏していたのか？ 調べる必要がある。

なにより「この人物と事件との関連性」が気にかかる。

この白髪の少年 いや、もしかすると少女なのかもしれないけど（角度や服装の関係上断言できない）、単に「防犯カメラに写っていただけ」ではテロリストだと断定するのは難しい。

テロと密入国は別問題だし、多少強引かもしれないけど「現場にいたのは、ただの偶然」という事例も考えられるからだ。

無論イリアなどからすれば笑い飛ばすに足る妄言かもしれないけど、個人的には可能性がゼロではない限り何が起こっても不思議ではないと思っている。

(それに……)

正直なところ、単に「調べるだけ」なら引き受けても構わないと思っっている。

現時点ではテロリストなのかどうなのか？ 事件と関係があるのかどうか不透明だし、イリアは「調べて」と言っただけだ。「捕まえて」とは一言も言っていない。

仮にオレが何一つ成果を上げられなかったとしても、神衛騎士団にとつては大したダメージにはならない。

わかればよし。わからなくてもマイナスにはならないのだから、オレとしても気が楽でいい。

ただ、少し引つかかるものがある。

それは気にしなければ気にならない程度の小さな違和感だけど、ここに至るまでの経緯を考えるときちんと確認しておいた方が良さそうだ。

「なあ、イリア。いくつか確認したいことがあるんだけどさ。お前、もしかしてオレになにか隠し事をしていないか？」

「へっ？ な、ななっ、なんでそう思うのよ？」

それまでどこか余裕のようなものさえ漂わせていたイリアが、突然慌て始めた。

その瞬間、オレは心の中である種の確信を抱いた。

「理由はいくつかあるけど、そもそも『どんな手を使ってでも騎士団に戻ってもらう』とか『余裕がない』とか口になっているわりに、ここに来た理由がオレに対して調査を依頼するだけっていうのはいくらなんでも温度差がありすぎはしないか？」

「……か、考えすぎじゃない？」

「そうか？ この程度のことなら、わざわざイリア自身がここにやってくる意味がない。誰か別の人間に命じたっていいはずだ。もち

るんそうすると断られる可能性があるから直談判しに来たって言うつもりだろうけど、調査だけならオレに頼むより他にいくらでも有効な方法がありそうなものだけだな。それこそ本当に余裕がないなら、専門機関や報道メディアを使ったっていいはずだ。違うか？」

「そ、それは」

「そしてもう一つ気になることがある。この依頼は神衛騎士団からの依頼なのか？ あるいはイリア個人の依頼なのか？ どちらかはつきりさせて欲しいんだけど」

「ぐっ、ぬうう」

面白いくらいにイリアの表情が変わる。

「最大の疑問は、いまお前がオレに話して聞かせた情報のことなんだけどさ。当然のことながら上から許可は降りているんだろうな？」

中でも「神皇国が墜ちる」なんてことが世間に知られたら、ただじゃ済まない。指摘した途端、イリアが思い切り目線を逸らした。

「……あのな、イリア。言うまでもないと思うけど神衛騎士には『守秘義務』っていうものがあるはずなんだけどな」

わかりやすく言えば「捜査上、重要な情報を外部に漏らしてはいけない」という規則だけど、そんなことは子どもだって知っている。にもかかわらず漏らしたということは当然違反行為に該当する。

事と次第によっては懲罰にかけられても不思議じゃない。だけどイリアは、

「も、問題ないわ。従騎士には認められていないけど、聖騎士以上には『独立捜査権』が認められているもの。捜査の過程で必要と判断した場合はその限りじゃないはずよ」

「なるほど。それはうっかりしていた。なら、許可証を見せてくれ」

「きよ、許可証？」

「知らないはずはないだろ？ 独立捜査権を有する者は例外なく直属の上司 イリアの場合は神衛騎士団団長の許可が要る。他だと軍務省に属する将軍や法務省の局長以上、あとは……それこそ陛下から直接許可が降りない限り認められない。平たく言えば『この事

件に関して機関とは別に捜査したいので許可してください』と申請した上で認められ、許可証が発行されてからでないかとダメだつてことなんだけど」

そうしなければ、組織の中で統制が取れなくなるからだ。皇女という身分も関係ない。

「おまけに『捜査の過程で必要と判断した』と言うことは、当然この少女に関して一連の事件と直接関係があるという具体的ないか？ 具体的な証拠がないと矛盾するだろ？ そこがどうしても気になるんだけどな」

もはや言葉も出ないのか、恨めしげな目を向けてくる。

「いずれにせよ、違法捜査の疑いがあるな。それに関わった者も同様に処罰される恐れがあるため、残念ながらオレとしてはお前の要請を受ける訳にはいかない。いくら罪人とはいえ、これ以上罪を重ねるつもりはないからな。さ、帰ってくれ」

本当に時間の無駄だった。オレは溜息と共に席を立ったが、「ねえ、ちよつと待つてよ！ た、確かに独断で動いているのは認めるわ。法に触れる行為を犯しているという自覚もある。でも、私は――！」

両手でテーブルを叩きながらイリアは勢いよく立ち上がった。しかし、オレは動じない。

「そこにどんな理由があろうと規則は規則だろ？ 無論『時と場合による』こともあるし、頭の固いことを言うつもりもない。けど今回の例に当てはめるのであれば、オレが従う必要はないだろ？ にもかかわらず協力だけ押しつけるというやり方は、もはや強引とかそんなレベルじゃない。横暴と言ってもいい。そんなことはお前だつて理解しているはずだ。なのにどうしてこんな真似をする？」

「本当に気付いていないの？」

イリアが言う。オレはほんの一瞬だけ間を空けてしまったが、すぐに「わからないな」と答えた。しかしイリアは「嘘つき」と言うのと、入り口に向かって歩いていった。

「仕方がない。今回は私の負けだから大人しく引き下がるけどアレン。私からも質問していいかな？ アレンは本当に『このままでいいと思っっているの？』」

「……ザレスさんたちと同じ様なことを言うな」

うんざりしたオレは、思いきり溜息を吐き出した。

「どこでなにをしようとおれの勝手だろ？ いまここでなにをし、そして将来どうするか選択する自由と権利がオレにはあるはずだ。他人にとやかく言われたくないな」

「よく言うわ。私が『神衛騎士になる』と言った時、全力で制止しに来たのはいったいどこの誰だったかしらね」

「さて。憶えていないな」

口にした途端、再び「嘘つき」と言われてしまった。

「それに、私が伝えたことは本当よ。本当にこのままじゃ取り返しのつかないことになる。それでもアレンは逃げ続けるつもりなの？

いつまで目を逸らし続けていれば気が済むの？」

「酷い言われ様だな。オレはただの一般市民だぜ？」

「でも、アレンなら犯人に繋がる重要な手がかりを掴めるはずだわ！ 事実ほんのわずかなとっかかりだけで、瞬く間に私の気持ちや目論見を見抜いたでしょ？ そんなことができるのはアレンだけだわ」

「それこそ過大評価だし、他にも適任者は大勢いるだろ？」

あくまでも逃げの一手を打ち続けるオレに対し、イリアもとうとう堪忍袋の緒が切れたのか憤懣やるかたないといった様子で、

「そうかもね。例えばあなたのお父様である神衛騎士団団長ヴァリス・マグダヴェルとか」

言われたオレは自分を制しようとして 失敗した。

「表情が変わったわね。そんなに嫌なの？ あなた自身が、かの『救国の英雄』の息子であるという事実を認めるのが」

「別に。それにオレはマグダヴェル家とは関係ない。法的にも全くの他人だ」

今のオレは“アレン・ラングフォード”だ。

アレン・マグダヴェルという人間は、この世のどこにも存在しない。

「でも、あなたが団長の　いいえ。ヴァリス・マグダヴェルの血を引いている事実は誰にも否定できないわ」

指摘され、オレは奥歯を噛みしめた。

「アレンのことだもの。恐らく『オレがいなくても団長がいれば問題ない。必ず事件を解決に導くはずだ』とか言うつもりなのかも知れないけど、団長だって人間なのよ？　神ではないわ。どうしたって『できること』や『やれること』に限界がある」

「それはオレも同じだ」

「そうね。私やシエイル、レクスやエトラ　みんなそうよ。それぞれ限界がある。だからこそ協力する必要があるんじゃない。そんなこともわからないの？」

「わからない」

心と正反対の言葉を口に出す。イリアは「そう」と短く呟いたあとオレの前に立ち、

「なっ！」

いきなりオレの頬を張った。

「いい加減にして！　いつまでも弱虫みたいにいじけていないで、現実にも目を向けなさい！　あなたがどれほど拒絶しようと事実は変えられないわ！　このままじゃ国は滅びる。それを避けるためにはアレンの協力が必要なの！　確かにそこには様々な事情や理由があるのは知ってる。でも、だからこそ私はアレンにそう言った困難を乗り越えて欲しい……いいえ。もっとはっきり言っわ。アレンならこれまで経験した様々な苦難を必ず乗り越えられるって信じてる！　アレンに必要なのは『きっかけだけ』だと思ってる！　だから私

は　……！！」

「……もういい。帰れよ。帰れ！」

頬を抑えながら、オレは怒鳴り声を上げた。

しかし、イリアは微塵も動かない。そんなことで怯んでたまるかとでも言いたげな、強烈な意志を発している。

「それにさつきも言ったけど、このままにもせずについて、それ以後になつて取り返しのつかない事態になったらどう言い訳するつもり？ それこそ“あの時”の過ちを繰り返すだけじゃないの！？ あなたが私の兄を見殺しにした時のように！」

言われたオレは思わず一歩後ずさってしまった。

「忘れたとは言わせないわよ。あなたは一年半前、私の兄であるウイエルと共に規律を破つて無断で地上に降り」

「やめる！」

考えるよりも早く、オレは再び怒鳴り声を上げた。しかしイリアは黙らない。

「確かに状況を考えれば『事故』だったのかも知れないわ。けど、どういふ訳かあなたは生きて戻り、兄は死んでしまった。それこそ当時大勢の人が口にしたように、兄はあなたに殺され」

「違う！ 違うんだ！ オレは……」

そこまでだった。オレは高ぶる感情と共に突然胃の中から込み上がるものを感じ、その場に膝を付いたまま口を手で覆った。

幸か不幸か、胃の中の物を店の床にぶちまけるようなことはしなかったが、しばらくの間にも考えることができずその場にうずくまることしかできなかった。

イリアもまた、長い間なにも言葉を発しなかったが、

「……そうね。確かにいまのあなたじゃ、却つて足手まといになるかも知れないわね。今日のところはそのまま引き下がってあげる。何度も言うけど私は忙しいの。でもね、これだけは言わせてもらいわ。あなたの力は微々たるものかも知れない。大したことは出来ないのかも知れない。でもあなたには“なにか”を変える力があるって信じてる。そしてそんな力を持ちながら大事な時になにもせず、後で後悔するような愚行を繰り返すなら私は 私は、あなたを許さない。いずれ兄を殺した憎い人物として、必ずこの手で裁いてみ

せるわ」

そう言い、イリアはそのままドアの向こうへ消えていった。

オレは出て行った少女を追うこともできず、店の中で呆然とすることしかできなかった。

「クソツ！ 言いたいことだけ言って帰りやがって！」

いまさらオレになにができるというのだろうか？

わからない。本当にわからない。

「……頼む。誰か 誰か助けてくれ！」

溢れ出る涙と共に呟いた声は、まるで闇に吞まれるかのように溶けて消えてしまった。

## 第一章「光と影の楽園」(1-4)

他人のせいにするのは愚の骨頂だと理解しているつもりだけど、イリアのおかげでその後の仕事は散々だった。

幸い致命的なミスをするようなへマは犯さなかったけど、精神的なものも所々で表に出てしまったらしく「いったいどうしたんだ？」  
「いつもの君らしくないな」などとお客様に心配された挙句、様子を見に来たザレスさんに「真面目に仕事しろ！」と注意される有様だった。

そんなこんなで午後六時を迎え、閉店作業を終えたあと中央商業複合施設へカーテンを買いに行こうと思っていたら、  
「すまない、アレン。買い物に行くのなら、ついでにレーメも連れて行ってくれないか？」

と、ザレスさんから半ば強引にレーメのお供を命じられてしまった。

(まあ、それ自体は別にいいんだけど)

恐らくフォティアさんの件でなにかあったのだろう。時間も遅くしかも帰ってきたのがレーメだけだったこと。夕方頃からザレスさんが異様に落ち着かない様子で慌てふためいていたことなどを考えると、出産予定日が早まったと考えるのが自然だ。

日頃の恩や朝の一件もある。買い物くらいどうということはないけれど、

(うーん。やっぱり置いてくれば良かったな)

レーメの会計を待つ中、行き交う人々の視線が気になって仕方がない。

その原因は、左右の腰に差した双剣だ。

これはレミアア神皇国最高の刀剣師であるレオルド・レイルが打った稀代の名剣なのだが、オレが店で働くようになってしばらくした後、突然押しつけられたものだ。

いつもは煙草を吹かしながら「ほっほっほ」と笑っている上に、  
どういう訳か本名で呼ぶと怒るため仕方なく「親方」と呼んでいる  
けれど、常々なにを考えているのかわからない人物だ。

さっきだつて「あとで戻ってくるんだから、置いたままでもいい  
ですよ」と言った直後、

「ダメじゃ。どうせ『ついうっかり』とかなんとか言つて、結局忘  
れて帰るんじゃない？」

と無理矢理持たされたのだ。Ｉカードを持っているため違反には  
ならないけど、やはり「私服に双剣」という格好は非常に目立つ。  
正直恥ずかしくてたまらない。

(いつそ売っぱらつてやろうかな)

親方は変わり者の上に頑固者なので、本人が気に入った人物でな  
ければどれほど大金を積まれても剣を打つことはないため、金でレ  
オルドの刀剣を手に入れることができるのならいくらでも出すとい  
う人物を何人も知っている。物も悪くないため、売れば数年は遊ん  
で暮らせるくらいの金が手に入るはずだ。

とはいえ、実際にそんなことをしたら後でどんな目に遭わされる  
か想像できないのでやらないし、なによりオレは

「お待たせ。アレンお兄ちゃん」

頭の中でゴチャゴチャ考え事をしてしていると、小さな身体で持ち上  
げるように荷物を持ったレーメが戻ってきた。見ていて危なっかし  
いのですぐにその荷物を受け取ったが、

(つたく。あの人たちはなにを考えているんだ?)

わずか七歳の女の子に持たせる量じゃないぞ、これは。

丸々と膨らんだ超特大の買い物袋が三つ。それを強引に持とうと  
するレーメもレーメだけど、もう少し考えてから物を買えばいいの  
に。

「『空間転送サービス』だつてあるんだし、わざわざ持ち帰らなく  
ても」

「でもその分お金がかかつちゃうでしょ? 家までそう遠くないし、

なにより浮いたお金で好きな本を買っていいって言われたから、いい」

「本、ねえ」

言うまでもなく、新聞同様大抵の書籍はデータ化されている。

しかし紙製の本に対して根強い愛着を持つ者も多く、レームもその中の一人だったりする。

「高いし、重いし、かさばるし、なにより置き場に困らないか？」

「でも、データだと消失する危険性があるし、バッテリーの問題も……それに最近アナログな物が流行っているの、知らないの？」

レームによると紙製の本だけでなく、パズルや知恵の輪、ブロックやボードゲームなどがブームになっているのだと言う。確かにそんな話をチラツと聞いたことがあるような気がするけど、あまり興味がないため忘れていた。

「それより、必要な物はこれで全部？」

「うん。何度も確認したし、これで大丈夫なはずだよ？」

「オレもカーテンを買ったし、この後どうする？ 書店に寄って行くか？」

「そうしたいのは山々だけど、今日はいいよ。大荷物を持ったお兄ちゃんを無駄に歩かせるのは申し訳ないし」

さりげない気遣いが心に染みる。相手がフォティアさんなら、お構いなしに行くはずだ。

「それよりお父さんと仲直りしたの？ わたし、嫌だよ？ いつまでもケンカしてるなんて」

「別にケンカしてた訳じゃないけど、ちゃんと言うべきことは言ったよ」

休憩中、礼を言ったついでに「もう少しだけ時間を下さい」と頭を下げながらそう伝えた。

（ほんと、厳しいよな）

自分の息子と言う訳でもないのに、オレの甘ったれた態度を容赦なく糾弾する。

いろいろ言われるのが嫌なら早く決断した上で、きちんとした態度を見せればそれで済む話なんだけど。

(でも、オレは )  
どうしても「あと一押し」が足りない。

口に出して言うことはないけれど、オレだって“前”に進みたいと思ってる。それこそ醜く喚き散らしたいほどに渴望している。

でも、実際にはイリアの言うとおり現実から目を逸らし、無様に逃げ回っているだけだ。

あれから一年半もの時が経つが、まるで成長していない。

(オレはどうすれば いや)

「ところでアレンお兄ちゃん」

突然呼びかけられたオレは、驚きのあまり袋を一つ落としてしまった。

「わああ、お兄ちゃん！」

幸い素早くレーメが袋の口を押さえてくれたため中身がぶちまけられるという惨事は免れたが、おかげで周囲にいた人々の視線を一心に浴びる結果になってしまった。

「もう！ さつきから変だよ？ なにかあったの？」

「い、いや。別ににも」

言ったのだが、間髪入れずにジト目で「嘘つき」と断言されてしまった。

「さつき、お父さんから聞いたもん。わたしたちが病院に行っている間、イリアお姉ちゃんがお店に来たんでしょ？」

(あの狼男め！)

余計なことをレーメに話すのはやめてもらいたいと思う。

「詳しいことは知らないけど、日頃忙しそうにしているお姉ちゃんがわざわざお店に来たんだもん。なにかあったと思うのが普通ですよ？」

「確かにその通りなんだけどな」

大した洞察力だと感心する。これで七歳だと言うのだから呆れる

より他はない。

やはり「本を読む子は頭が良い」という俗説は真実なのだろうか？  
とはいえ、いまこの状況に限って言うのであれば面倒なことこの上ない。

「イリアお姉ちゃんは神衛騎士なんだし、お兄ちゃんもなにか手伝ってあげたら？ きつと喜ぶと思うよ？」

「……あいな」

さすがにげんなりしてきてしまった。

レーメはイリアが神衛騎士だということは知っているけど、皇女だということは知らない。

そもそも「イリア」というのは本名ではなくニックネームといった方が近い上に、詳しい事情を知らない。だからこそ単純に「困っているなら助けてあげて」と言っているんだらうけど、話はそんな簡単なものじゃない。しかし、

「友達なら助けてあげないと」

無邪気な笑みを浮かべながら言われたオレは言葉を詰まらせた。

あまりにも率直な物言いに、柄にもなく動揺してしまったからだ。

「……レーメ。一つ勘違いしているぞ？ 別にオレとイリアは友達じゃない」

「違うの？」

「当たり前だろ」

オレはただのクズで、イリアはエリート中のエリートである上に“時期女皇”だ。

イリアは人間として心の底から尊敬できる素晴らしい人物だと思っ  
ているけど、どう考えても「友達」という関係じゃない。

ただの「知り合い」「幼馴染み」だ。

それ以上でも、以下でもない。

レーメも納得してくれたのか「そうだよな」と相槌を打ったが、  
「アレンお兄ちゃんとイリアお姉ちゃんは“恋人同士”だもんね」

とんでもないことを言ったため、オレは思わずその場に崩れ落ち

そうになった。

(いったいどこをどう見たら、そういう風に見えるんだ!?)

「冗談じゃない。誰がどう見てもオレの方が劣っている! 釣り合わないのは明白だ。」

それに、イリアがオレに思いを抱いているなどと言うことは絶対にない。

“あの事件”のことがある以上、イリアは永遠にオレを赦しはしないだろう。

「……なんだか疲れたな。早く帰ろう」

さつさと布団を被って寝てしまいたい。そんな誘惑に駆られたが、「ねえ、お兄ちゃん。ちよっとだけ寄り道してもいい?」

不意にレーメがそんなことを言い出した。

「来た時から少し気になっていただけ、向こうのステージでやっつてる競売会の様子を見てきてもいい?」

レーメが言っているのは、このフロアで月に二回ほど行われているリサイクル品を中心とした慈善競売会のことだ。割とポピュラーな催し物で結構人気があると聞いているが、毎回大勢の人で賑わうためあまり熱心に覗いたことはなかったのだが、

「なにかお目当ての物でも出品されるのか?」

尋ねると「話によると、貴重な本が何冊か出品されるんだって」という返事が返ってきた。

(なるほど。本好きにも関わらず書店に行かないといった理由の一つがこれか)

レーメのことだから純粋にオレのことを気遣ってくれたこともあるんだろうけど、場合によっては競売に参加したいという思惑もあったに違いない。

「ま、別に急いでる訳じゃないし」

「じゃあ、カタログもらってくるね!」

言っが早いか、店員がいるところへ駆け出していった。一方オレは通行の邪魔にならない壁際の位置に陣取ると荷物を降ろし、程な

く帰ってきたレーメと共にカタログに目を通した。

「ふーん。結構色々な物が出されているな」

しかし、既に競売も終盤にさしかかっている。人気の商品はあらかじめ競り落とされたのか、特にめぼしい物は残されてはいない様子だった。

リグニン製の生活用品やシリコン鍋。玩具に本に自転車という内容では無理もないだろう。

いつもに比べて人が少ないはそのせいか。

（残っている人の大半は、一番最後の『高級ホテル宿泊券』を目玉にしているんだろうけど）

なんか物凄く場違いな出し物のように感じるのはオレだけだろうか？

「ところでレーメのお目当ての本は？」

尋ねたが、どうもレーメの表情が優れない。

「うーん。確かに貴重な本んだけど」

貴重なだけで、あまり関心がそられないらしい。だが、

「あれ？ 『ひかりのめがみ』が出品されてるじゃないか。しかもこれは」

説明によると、現存する数少ない「原書版」にして聖典「光の女神」から忠実にその内容を絵本にした珍しい本だと言う。

内容は、神皇国の国教であるフェリシア教の創造神『女神フェリシア』について書かれた本で、その昔悪い竜に苦しめられていた人々が懸命に女神に対して祈りを捧げたところその願いを聞き入れた女神が竜を懲らしめ、その後改心させて自らの守護竜にしたというお話だ。

およそこの国で知らない者はいないだろうし、中でもこの絵本はなにかの事情でデータ化されていなかったはずだ。そんな噂を耳にしたことがある。

そもそも現在浸透している聖典の元となった書物は、この国がまだ地上にあった頃に他国から伝わってきた物が広まったと言う。

しかし、そこに書かれた文字は当然異国の文字である上に、翻訳する際どうしても違いが生じてしまう。

その問題を可能な限りなくしたものがこの絵本「ひかりのめがみ」だ。

言語学者にして神学者のパメル・リードラーが「子どもでもわかりやすく、かつ正しい形で神の教えを広めるため」に描いたもので保存状態もかなり良好らしいけど、レーメの心の琴線には触れない様子だ。

「ちよつと値が張るけど、コレクションとして持つておくのもいいんじゃないか？」

「でも、あの本は……」

レーメが口の中でごいごいによごによごに呟いていたが、周りの雑音のせいでよく聞き取れなかった。

「それよりお兄ちゃん。ちよつとお手洗いに行つてきてもいいかな」

「ああ、ここで待つてるよ。くれぐれも知らない人に付いて行つたりするんじゃないぞ」

「ひどーい！ わたし、そんなに子どもじゃないもん！」

頬を膨らませたあと、行つてしまった。ああいうところが子どもっぽいのだが、

(なんだか今日は、溜息が多い日だな)

……再び思考が沈んでいく。考えてみれば、ろくな事がなかったよ  
うな気がする。

悪夢を見たり、フィオンにベッドに潜り込まれたり、ザレスさんやイリアと口論したりと散々な一日だったよ  
うな気がする。なによ  
り、

(このままなにもしなければ、あと半月で墜ちる……か)

信じたくないが、イリアが言う以上真実として受け止めなければならぬ。恐らくいまも最悪の事態を避けるために不眠不休で走り回っているに違いない。

昔から真面目で、頑固で、一生懸命で 家族以外で最初に好き

になった女の子。

オレも男だし、イリアに対して恋愛にも似た感情を抱いたことは一度や二度じゃない。

でもオレは“大きな罪”を犯してしまった。

故意にはなかったにせよ、オレはイリアの兄であり親友のウイエルを死に追いやってしまったのは変えようのない事実なのだから。そして、今また差し伸べられた手を振り払ってしまった。あれこれ理由をつけて逃げ出してしまった。さぞや失望しているだろう。それに、

（イリアのことだ。少しずつ事件などに関わらせることによって、いずれオレを神衛騎士団へ戻すきっかけにしたいと思っているのかも知れない）

今のままでは、どんな手段を用いても必ず角が立つ。

しかしオレが時間をかけて少しずつ実績を積み重ね、能力が優れていることを証明し続けることができれば、必ずしも「あり得ない話」とは言い切れない。世間の目も変わるはずだ。

「でも……」

堪えきれず、吐き出すように呟いた時だった。

（ん？）

気のせいだろうか？ 微かに異臭のような物を感じる。しかも、

（なんだ、あいつは？）

周囲に視線を配った際、一人の人物に意識が注がれた。

今の今まで気がつかなかったけどその人物は帽子を目深に被り、ブランド物と思しき黒のサングラスをかけ、口元を白いマスクで覆っている。

服装は非常にシンプルで黒のシャツにジャケットを羽織り、茶のハーフパンツを履いている。

どうやら見た目よりも“動きやすさ”を重視しているようだけど、オレが目にしたのはそこじゃない。

（なんて言えばいいんだ？）

言葉に詰まるほど、その人物をすぐに形容することができなかった。

言い方を変えるのであればそれなりに目立つ格好をしているにもかかわらず、誰も意識や関心を向けていない。まるで幽霊のようにその存在が極めて薄いのだ。

また遠目で見る限り、男なのか女なのかさえ判断がつかない。

少年のように見えるし、妙齢の女性のようにも見える。

(そもそも、いつからいたんだ?)

多少人が少なくなっているとはいえ、ここは都市の中で最も栄えている商業施設だ。すぐ上の階にはレストランや映画館、プラネタリウムなどがあり、中層階には無数の企業が名を連ね、上層階はホテルとして利用されている。また、地下には駐車場の他にアミューズメント施設や共同浴場、体育館やプールなども備わっている。

高さは国内で六番目の四百四メートル。ビルとしては最大の規模を誇る建物であるため人の数や往来は決して少なくはないし、場合によって声をかけられることもあるはずだ。

現にオレも、ここに来るまで二度ほど声をかけられている。しかも、

(まさか……)

そう思った矢先の出来事だった。

何の前触れもなく、突然けたたましい音がスピーカーから流れ出した。音量も大きく、思わず身を竦ませてしまったほどだ。

いったいどうしたんだ? と思っていると、

『館内にいらっしゃる全てのお客様に申し上げます。ただいま十三階レストランフロアにおきまして火災が発生いたしました。直ちに係員が避難口へ誘導いたしますので、どうか冷静に避難していただきますようお願い申し上げます』

という説明が為されたため、オレは自分の耳を疑ってしまった。

(十三階って、二つ上のフロアじゃないか!?)

もしかして先ほどの異臭は、なにか物が燃える匂いだったのか?!? しかも、

(このタイミングで火災ということは ツ!?)

即座に「テロ」という文字が浮かんでしまう。

ただ不幸中の幸いとも言うべきか、パニックになるよりも早く店員が総出で避難誘導を始めたため、みるみるうちにフロアから人の姿が消えていく。

「お客様! 非常に危険ですので、避難をお願いします!」

女性店員に声をかけられたが、オレはすぐに動くことができなかった。

「レーメが 一緒に来た子が、まだ戻ってきていないんだ!」

時間的には戻ってきてもおかしくないし、場合によっては先に避難を開始している可能性がある。店員も同じことを思ったのか、

「きっと別のスタッフが誘導しておりますので、急いでここから避難してください!」

言われたオレは逡巡したあと、その言葉に従うべく床に置いておいた荷物を持ち上げた。

だが、これが失敗だった。

「アレンお兄ちゃん!」

丁度荷物を持って顔を上げた瞬間、少し離れたところからレーメが駆け寄ってくる姿が見えた。その姿を見て胸をなで下ろしたが、「なっ!?!」

オレが見ている目の前で、炎をまとった天井の一部がレーメの頭上に降り注いだ。

まるで予想だにしない事態に、オレの思考は完全に停止してしまっ

た。しかも両手の荷物のせいできっとさに身動きをとることができず、その場に立ち尽くしたまま呆然とその様子を見つめることしかできなかった。

その時間は、わずか数秒にも満たなかった。だが、  
「……レーメ？ レーメえええつつつ!!!」

獣の咆哮にも似た絶叫が身体の内部分から発せられた。

オレは荷物を放り捨て、慌てて現場に駆け寄ろうとしたが崩れ落ちてきた瓦礫の量は思った以上に多く、しかも油臭い匂いと共にたちどころに炎が広がっていったため近づくことができなかった。

店員も危険と判断したのかオレの身体を掴みながら、

「危険です！ 離れてください！」

と言ったが、そんな言葉に耳を貸せる余裕などどこにもなかった。

「ああ……あああつつつ!!」

もはや最悪の光景しか、頭には思い浮かばなかった。

まるで“あの時”に似ている。

側にいながら、なにもできなかった“あの時”に。

「レーメ！ レーメ！ 返事をしてくれっ!!」

半狂乱になりながら必死に店員の制止を振りほどこうとしたが、

「お、お兄ちゃん？ アレンお兄ちゃん！」

すぐ側でレーメの声がした。一瞬幻聴かとも思ったが、反射的に顔を向けるとそこには傷一つ負っていないレーメの姿があった。

その姿を見た瞬間オレは思わずレーメに向かって両手を伸ばし、次の瞬間には力強く抱きしめていた。

「ちょ、ちよつと、お兄ちゃん。く、苦しいよ」

「じ、ごめん」

言われ、オレはそつとレーメを解放した。

「……良かった。無事で本当に良かった」

勝手に涙がにじんでくる。安堵のあまり全身から力が抜けてしまった。

「で、でも。なぜ？ どうして？」

自慢する訳じゃないけど、オレはそれなりに視力はいい方だと思っっている。

故にあの瞬間 瓦礫がレーメの頭上に降り注いだ時、オレは彼

女の身になにが起こったのか理解することができなかった。

むしろ巨大な瓦礫に押し潰され、黒煙を吐き出す炎に全身を焼かれたレーメの姿を想像することしかできなかった。

しかし目の前にいる少女には、わずかに動揺と困惑の色が見えるもののケガをした様子はない。腕に抱いた感触も決して幻などではなかった。するとレーメは、

「わたしもよくわからないんだけど、お姉ちゃんに助けてもらったの」

「？ お姉ちゃん？」

周囲を見回したが、それらしい人物は見当たらなかった。だが、実際に顔を見た訳じゃないし、その人はサングラスにマスクをしていたから」

言われ、瞬間的に先ほどの人物が思い浮かんだ。

「それなのに、どうして女性だと思ったんだ？」

「えっとね。最初になにが起こったのかわからなかったけど、気がついたらそのお姉ちゃんに抱きしめられてて　その。結構胸が大きかったし、しかも『大丈夫？』って聞かれた時、若い女の人の声だったから」

「抱きしめられた時の感触と声でそう判断したのか」

レーメの言葉だ。恐らく間違いないだろう。それに、

「と、とにかく無事で良かった！　ここも危険ですから、早く逃げましょう！」

店員の言つとおり、一刻も早くこの場を離れるべきだろう。けど、「ごめん、レーメ。どうしても気になることがあるんだ。オレのこととは構わず、このままお姉さんたちと安全な場所へ逃げてくれ」

「へ？　でもお兄ちゃん。いったいどこへ」

「大丈夫！　すぐにオレも逃げるから心配しないでくれ！」

呼び止められたが、オレはそれを無視して勘を頼りに走り出した。（どこだ？　いったいどこに行ったんだ？）

全身の感覚を研ぎ澄まし、辛うじて残された微かな気配を辿る

それは砂漠で一粒の砂金を探し出すようなものなのかも知れない。本来なら絶対に不可能なことだろう。それどころか『無意味で無謀な行為』と言われても仕方がない。

しかし、いまのオレには確信にも似た思いがあった。

少なくとも、自分の行動に一切の疑問や迷いを感じることはなかった。

オレは売り場フロアから従業員専用フロアへ行き、道なりに奥へ奥へと進んだ直後、

「っ！ いた！」

イベントステージへ続く廊下でその姿を捉えた。向こうもオレの存在に気付いたらしい。

「……こんなところでなにをしているの？」

マスク越しに聞こえた声は想像していたよりもずっと若い、それでいて鈴の音のような美しさを感じさせる声だった。オレはほんの一瞬その声に心を打たれたが、

「それはこっちのセリフだよ。そんな変装までして。いったいなにが目的なんだ？」

「別に。答える必要はないわ」

興味ないとも言いたげに言ったが、

「……えっ？」

何事か呟いた直後オレの目の前でマスクを外し、帽子を脱ぎ捨て、サングラスを取った。

思った通りだ。隠されていた素顔は、昼前にイリアから見せてもらった写真に写っていた人物に間違いない。だが、

（あ、あれ？）

よく見ると瞳の色が違う。写真の少女は確か紫色の瞳をしていたはずだ。しかし目の前の少女の瞳は陽光のように煌めく金色をしている。

（人……違い？）

だが、その他は服装を除けばすべて写真の通りだ。

しかし、困惑しているのはオレだけではないようだ。

「いったいどういう事なの？ なぜあなたがこの場所に」

途端なにかまずいことでも呟いたと思ったのか、驚いた様子で口を手で覆った。

しかし、手遅れだ。

「よくわからないけど、その様子だとオレのことを知っているようだな。理由は？」

尋ねたが、何一つ声を発しようとはしなかった。その代わりに突然腰を落とし、半身の体勢を取ったあとわずかに右肘を引いた。

直後、オレは反射的に剣を抜いた。

「なっ！」

いったいどんな技を使ったのか、文字通り瞬きするほどの間に距離を詰めたばかりか、オレの心臓めがけて手刀を繰り出してきた。

あとほんの一瞬でも剣を抜くのが遅れていたら、確実に殺されていただろう。

「いまのわたしの手刀を難なく受け止めるなんて　ほんと、見ると聞くのでは大違いね。アレン・マグダヴェル」

（こ、こいつ！）

間違いない。オレのことを知っている！？

「お前、何者だ？ なぜオレのことを知ってる？ それ以前になぜレーメを助けた？ テロリストじゃないのか？ なら、この場にいる理由は？ この火災となにか関係しているのか？」

矢継ぎ早に質問を浴びせたが、返答の代わりに再び攻撃を繰り出してきた。いずれも洗練された美技とも言える攻撃で、両手に剣を握っているオレが完全に防戦を強いられる形になってしまっている。  
（信じられない！）

心の底から叫びたい気分だ。確実に神衛騎士と同等か、それ以上の戦闘能力を有している。

「キリがないわね」

少女は小声で呟くと、自ら後退して距離を取った。オレは攻撃に

転じるべきか迷ったが、

「時間がないし、あなたが本物のアレン・マグダヴェルなら……」  
少女が深呼吸をした次の瞬間、突然彼女の殺気が爆発的に膨れあがった。

（ま、まずい！）

反射的にそう思ったが、あまりにも対応が遅すぎた。

脳内に浮かび上がる“光景”

そして、本能的に感じる恐怖と絶望

特になにかされた訳でもないのにオレは自ら地面に膝を付き、片手で口元を覆った。

「情報通りね。それじゃ、さようなら。もう二度と会うこともないでしょう」

踵を返し、姿を眩ませようとする。オレは口を覆っていた手を強引に伸ばしたが、届くはずもなければ少女が動きを止めるはずもない。

（せ、せつかく掴みかけた手がかりなのに　っ！）

協力する気はなかったとはいえ幾重にも積み重ねられた偶然の結果、テロリストに繋がりがああるかも知れない人物を目前にして自ら膝を折ってしまった。

つくづく自分という存在が恨めしい。

肝心な時に役に立てない己の身体を、容赦なく斬り刻んでやりた  
いという激情に駆られる。

だが、

「悪いけど、あなたを逃がす訳にはいかないわ」

突然女性の声が聞こえたかと思うと、この場を後にしようとしていた少女が振り向いた。

「くっ」

少女の目には明らかに動揺と困惑の色が浮かんでいる。しかも、

「《多重結界壁》ツ!?!」

突如周囲の空間に浮かんだ青白色の文様を見て、驚愕のあまり叫び声を上げた。直後、

「があっ!?!」

結界内に生じた青白い電流を受けた少女が床に崩れ落ちる。

(結界壁はともかく、最後の雷撃は……まさか!?!)

後ろを振り返ると、そこには一組の男女が立っていた。

一見するとどこにでもいそうだが、その胸には大人の拳ほどの大きさの機械仕掛けのペンダントがぶら下げられていた。

これはスフィア理導器と呼ばれる特殊な道具で、所有者の身体能力を高めたり“フォールス理導魔法”と呼ばれる魔法のような現象を起こすために必要な物だ。当然使い方によっては犯罪を助長する可能性があるため武器同様携帯・使用には許可が要る製品だ。

しかし、そんなことは些末事でしかない。二人の顔を見て呆然とすることしかできなかった。

「珍しい場所で会うものですね。このような場所でなにをしているのですか?」

そう口にしたのは神衛騎士団の副団長であり、神皇国内で最強の能力を持つ理導使い(フォリスマスター) 《白銀》の称号を持つシエイル・アルメニストだ。

長い銀色の髪に眼鏡をかけた理知的な表情からは、いったいなにを考えているのか一切読み取ることはできない。しかもこうして顔を合わせるのは久しぶりだった。

元々神衛騎士団の中でも「絶世の美女」との呼び声が高かったけど、さらに磨きがかかったらしい。

でもオレは、昔世話になった女性の言葉に応じることができなかった。

もう片方 黒髪に焦げ茶色の瞳をしたスーツ姿の男と目が合い、口を閉ざさざるを得なかったからだ。

「顔を合わせるの是一年ぶりか。見たところ相変わらず愚行を繰り返

返しているようだな」

鍛え上げられた鋼の刃のような表情から紡ぎ出される辛辣な言葉。だが、異を唱えられるはずもない。

オレは肺に溜め込まれた息を吐き出すとゆっくりと顔を上げ、こ  
う呟いた。

「そうだな、父さ　　いや。ヴァリス・マグダヴェル。その通りだ  
よ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8251z/>

---

クロスレイド ~ 緩やかに腐滅する天空の理想郷 ~

2011年12月26日04時54分発行